

年間第二十五主日

2014.9.20 18:30 ミサ

クラレチアン宣教会 長崎壮助祭

第一朗読 イザヤ 55・6-9

第二朗読 フィリピ 1・20c-24、27a

福音朗読 マタイ 20・1-16

ぶどう園の労働者のたとえ

今日の福音の中でイエス様が語られた“たとえ”には違った立場の何人かの登場人物が現れます。ぶどう園の雇い主、朝から夕方まで働いた労働者、また夕方五時から働き始めた人もいます。皆さんは誰の立場になって読んででしょうか。そして誰に一番共感したでしょうか。

私は修道会に入る前に出版社で十年ほど働きましたが、その間いわゆる好景気というものを経験していません。バブル崩壊後に入社して、頑張れども頑張れども会社全体の業績は上がっていかない状況でした。たまたま、外回りの仕事をしていたため、広告営業の仕事をする機会もありました。随分頑張ったつもりで、ボーナスアップを期待したのですが、全体の業績が思わしくないため、結果は期待通りの金額に届かず、がっかりした思い出があります。今になって思い返せば、社内で裏方として黙々と頑張っていた人もいたわけで、随分独りよがりな思いを反省していますが、とにかくこういった経験があるため、私はこの話を腰を据えて読んだ時に、自然と、朝から働いていた労働者に自分の姿を投影して、「神様は随分不公平だなあ」と理不尽な印象を持ちました。

それと同時に人間とは誰もが“功績”を求め、そして評価されることを願っているということも感じました。確かに「正當に評価してもらっているな」と感じた時、私たちはやる気を出します。しかし、「正當に評価してもらえていない」と感じれば途端にやる気を失ってしまうものです。多くの人、特に社会のただ中で働いている人は私と同じ思いを抱いたのではないかと思います。

それでは、なぜ私たちはそのように感じるのでしょうか？ その理由の一つは、現代社会に生きる私たちは“時給いくら”という発想にあまりにも慣れず

ぎていることが挙げられるでしょう。いわゆる“相対化”の発想です。相対化とは、あるものの価値を他のものに置き換えて換算する方法です。カール・マルクスは労働力を資本に換算しましたが、現代人は本来お金に換算することができないはずの人間の命でさえも生命保険という形で相対化しているのです。

相対化の考えでこのたとえを読むと、朝早くから働いていた人と夕方ちよこっと仕事をして一日分の給料をもらった人を比較して、前者を損した人、後者を得した人と考えてしまいます。

また、公平・不公平という身近な視点で読んでみても、「雇い主の報い方は随分不公平ではないか」という不満も出てきます。しかし、公平・不公平という考え方も、二人以上の人がいれば彼らを比べることによって初めてことが成り立つ、比較に基づいたものの見方です。

一デナリオという金額は、当時の一日の賃金として正当なものであったと言われていますから、本来であれば朝から働いていた人はその金額で満足すべきでした。少なくとも契約をした時にはそれで納得したはずです。それが、終業間際に来た人が自分と同じ給料をもらったのを見て、「自分がこんなに苦勞したのに・・・」と損をしたと誤ってしまったのです。

それでは、ここで雇い主にたとえられる神様の報い方に目を移してみましょう。イザヤ書 55・8 には「私の思いはあなたたちの思いと異なる」とありますが、実際どうなのでしょう。このたとえの雇い主の言葉、「友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたは私と一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。私はこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ」から読み取れることは、どうやら神様は功績に応じて報いるのでなければ、私たちの考える公平さによって報いるのでもないようです。あえて公平という言葉を使うならば、“功績による公平さ”というよりも“存在における公平さ”によって報いてくださるのです。

また、私たちが他と比べて相対的なものの見方をするのとは反対に、比較を超えた報い方、ひとりひとりをかけがえない存在として慈しむ絶対的、つまり比較を超えた見方によって報いてくださるのです。

皆さんにもこういった神様の思いが伝わってくると、何か聖書の他の箇所を思い出すのではないのでしょうか。わたしはこのぶどう園の雇い主の姿は、ルカ福音書の「放蕩息子のたとえ」に描かれたお父さんの姿にとてもよく似ていると思います。

以前、このような話を耳にしたことがありました。ある小学校の運動会で競技の成績が上位の子供だけ賞品をもらえることになっていました。競技が終わった後、賞品をもらって喜んでいる子供の後ろで、頑張ったのに何ももらえなくて肩を落としてがっかりしている子供がいました。しかし、あとで、大人が気を利かせて賞品をもらえなかった子供にも「よく頑張ったね」と同じものをあげたそうです。そうしたら、最初に賞品をもらった子供が、「よかったね」と、自分だけでなくがっかりしていた友達が賞品をもらえたことをともに喜んだというお話です。神様が私たちに期待していることは、こういったことかもしれない。

皆さんも子供の時にこれと同じようなことを実際に体験したり、見たりしたことがあるのではないのでしょうか。子供の世界では、このようなことが結構あったような気がします。それが大人の世界になると少なくなってしまうのは残念なことです。

最後になりますが、今日のイエス様が語った“たとえ”は、「天の国は次のようにたとえられる」と「天の国」についてのお話でした。この天の国とは、私たちが「主の祈り」の中で「御国がきますように…」と祈るこの御国とおなじものです。つまり、主の祈りにおいて私たちが祈る内容とは、今日のたとえで示された、ひとりひとりの存在自体を大切にされる神様の意志が「私たちの住む社会にも浸透していきますように」いうことなのです。

このような神様の価値観が私たちひとりひとりの間に芽生え、広がっていくことを祈願しながら、このミサを続けましょう。